

横浜雑記 将木町にて

鈴木 美恵子

昔から、何かと横浜には縁があるようだ。10代の終わり頃、所属していた美術クラブで外国人墓地周辺へ油絵を描きに行った。何を描いたかは全く覚えていないが、近くの洋館レストランで、ナイフとフォークを使ってガチガチになりながらランチをしたことは、鮮明に覚えている。

山下公園は若かりし頃のデートコース。桜木町駅から海辺へ向かいベンチに腰かけ、揺れる波を眺めながら、ソフトクリームを頬張った日もあった。他愛のない話で時間が過ぎていった事も懐かしいものである。

今では桜木町駅東口から、エスカレーターでランドマークタワーへ直結になり、タワー上階にあるレストランでの女子会ランチも悪くない。「太平洋の白鳥」と呼ばれた帆船日本丸を見学して海のロマンに浸ったり、木の下大サーカスを見に行ったり。大サーカスは大人にも大変刺激的で、驚きと感

動の連続であった。意外にもテントの中は空調が効いていて、かなり快適なのである。

さて、JR桜木町駅を降りて長い地下道を抜け、野毛方面へ出る。2〜3分歩いた所に小さな小料理屋さんがあった。カウンタ―7席だけのこぢんまりと落ち着いたお店で、色白の大柄な女将さんが一人で仕切っていた。私も、60才を過ぎたら小さなお店を持ちたいと夢見ていたが、色々な出来事があり条件が揃わず断念した経緯があるので、女将さんとは何となく話しが合っていた。

県外から行く私は1年に2〜3程度程度の訪問客ではあったが、連絡すると必ず馴染みのお客さんと待っていてくれた。話しが盛り上がる、カウンタ―の端を両手でチヨチヨンと叩きながらリズムを取り、三波春夫の「チャンチキおけさ」を歌うのが、とても楽しいひと時だった。

翌年も、それを楽しみに桜木町へ向かった。また来年会いましょう、と行って別れ、再会の折は、お互いの無事を祝って乾杯した仲間会に行っていたのである。しかし、何時もの顔が揃っていない。そのうち遅れて来るのだろう、と

思っていた。ポツリと女将さんが「あの方、急な病気で亡くなったのよ」「あなたと歌ったチャンチキおけさが一番楽しかった、と言っていましたよ」と知らせてくれた。

客同士、誰も連絡先など知らない。その場所へ行けば会える、という深入りしない間柄だった。今日も1日無事に楽しく過ごせたと感謝して、眠りにつく日々なのだ。その場かぎりの飲み仲間ではあったが、あの人と居て楽しかった、と言ってくれた言葉に私は救われた。

今の世の中、いつ何が起るかわからない。誰かに恨みを持ったり、気まずい思いを残したまま別れたくないものである。少しでも心にゆとりを持ち、ユーモアのある生活を送りたいものだ。

ある日、女将さんから珍しく連絡があった。自分も80の坂を登り、一人でお店に立ち続けるのがきつくなつたと言う。近々お店を閉めると言うのだ。何時も其処にあるもの、と安心しきっていた私があった。しかし、どのような事でも何時かは区切りをつける時がやって来るものだ。寂しいものである。

最後の日、お礼を兼ねてお店を訪ねた時は、2人の常連さんが待っていてくれた。帰りには何時ものように、女将さんが握ったソフボールのように大きなオニギリがお土産だ。更にその日は、記念にお店のものを持ち帰って欲しいと言う。私は遠慮なく店内を見回して、以前から気になっていた小振りの暖簾を頂きたい、と言うと一瞬驚きの表情を見せた。長い間お店のシンボルのように、お客様の目に留まってきた物に違いない。「ダメかなあゝ・・・」と諦めかけた時、キツパリとした口調で「いいでしょう、大事にしてね!」と暖簾を外してくれた。藍染めの横幅1メートルほどの、愛着ある大事な大事な暖簾であった。

気風の良い女将さんの事は勿論、ゆるりと語り合いながら、チビリチビリと口にした熱燗の味も、ポロツともらした本音を聞いてくれた飲み仲間のことも、私は忘れないだろう。

あれから月日が経ち、ふつと思いつく時もあるが、あの日以来桜木町へ行く事もなくなってしまった。

(終)